

オーストラリアの人事戦略で成功する為には その40

オーストラリアの教育は、ぬりえ型と言われております。オーストラリアの教育方法では、学生に問題解決方法を考えさせるのでは無く、先生が言った事、先生が読ませた本を生徒がいかに解釈するか、という事に比重が置かれております。つまり簡単に言えば、お母さんが幼稚園生くらいの子供にぬりえの本を買い与え、クレヨンで色を塗らせる、それがオーストラリアの教育方法です。つまり、自分で描く、という事は教えていないのです。

これは、大学においても全ての科目で同じ事が言えます。アメリカのトップスクールでは、生徒は予習をしてから授業に臨みます。オーストラリアでは予習は必要ありません。なぜならば、ぬりえ型教育だからであります。オーストラリア内では伝統のあるシドニー大学、メルボルン大学でさえ予習は必要ありません。先生が講義をし、生徒はそれをいかに解釈するか、という事が最も重要であります。

従ってオーストラリアの社員は、上司が何を言ってもただ聞いているだけなのです。彼らが問題解決方法を自ら考えるという事は、ほぼ不可能であると思われまます。

ただ、たまには学校で非常に優秀なオーストラリア人の学生に会います。しかし、これは元々その学生に素質があったというだけであります。オーストラリアには努力をせずに良い成績を修める学生が約1%程います。

これに対して、日本とアメリカでは自らの努力で良い成績を修める秀才と呼ばれる学生がおります。しかしオーストラリアには、残念ながら秀才は存在致しません。優秀な学生は、元々素質があったという事に過ぎません。つまり、オーストラリアの学生の99%はあまり期待出来ないという事になります。日本とアメリカには秀才と呼ばれる学生が10%くらいおります。従って、日本とアメリカの一流企業は良い大学を出た学生を採用したがる傾向があります。

オーストラリアでは秀才はおりませんので、特に良い大学というのも存在致しません。従って、オーストラリアのブルーチップの企業では、特に大学で採用を決めるという事はあまりありません。

従って、社員が千人以上いる日系企業であっても、オーストラリア国内での問題解決は駐在員に任せられます。アメリカの秀才の学生をこちらに呼び寄せる方法もありますが、その様な学生はオーストラリアには来たがりませんので、それも不可能であります。従って、オーストラリア国内の優良企業では、社内での問題解決を社員に任せる事が出来ないため、トップマネジメントが予想問題集を作成し、解決策がマニュアル化されております。

この様に日系企業でも、予想問題とその解決策のマニュアルを作成する必要があります。これをもって初めて、オーストラリア人スタッフが安心して仕事出来る環境になるのであります。